

保育の安全と子どもの主体性

～たくましい子へ育つには～

提案者：安喰 茉柚
(学校法人 丸山学園 古河幼稚園)

○園の沿革

明治44年（1910年）丸山義一氏が古河市尊勝院を借り、保育資格者3名の保母で保育事業を始める。

大正元年（1912年）「古河幼稚園」として茨城県の認可を得る。

昭和2年（1927年）日米親善友情人形「青い目の人形」が贈られる。

昭和35年（1960年）二代目園長に丸山悦氏が就任。

昭和52年（1977年）現在地の古河市鴻巣へ移る。

昭和60年（1985年）学校法人丸山学園古河幼稚園と命名。

平成13年（2001年）三代目園長に丸山恵久子氏が就任。

平成22年（2010年）古河幼稚園創立100周年を迎える。

令和3年（2021年）古河幼稚園「青い目の人形メリーちゃん」をモデルに紙芝居ができる。

「青い目の人形メリーのねがい」

（脚本：宮崎二美枝 絵：片岡直子 発行：文民教育協会 子どもの文化研究所）



○ 園の概要

・ 所在地：茨城県古河市

「古河駅（西口）より南西約2kmに位置し、公方公園が間近にあり、自然豊かで四季折々の変化を肌で感じることができる。商業施設も周囲に多く便利である。」

・ 創立114年

・ 園児数【令和6年7月1日時点】

満3歳児（年少）3歳児と合同（2名）

3歳児（年少）1クラス（16名）

4歳児（年中）1クラス（16名）

5歳児（年長）1クラス（26名）

・ 職員数：9名

○ 教育方針

「三つ子の魂百まで」「すべての事に時あり」

(1) 目標

何事にも興味・関心を持ち、意欲的に行動できる子を目指している。又、良い環境の中で幼児の発育段階に応じた適切な指導を行い、日々の生活の中から誰にでも優しく思いやりの気持ちが育っていくことを希望し、専念している。

(2) 園児との関わりの中で

保育の安全を第一に考え、園児一人ひとりの性格を理解し、その園児にあった関わり・保育ができる様、職員間の連携、また保護者との連携を密にアイデアのある楽しい保育・行事が行える様、日々努力している。

- ・ 幼稚園って楽しいなあ
- ・ 早く幼稚園に行きたいなあ
- ・ 先生大好き

と言ってもらえるように！



1. はじめに

近年、保育の現場で続いて起きている事故や事件をメディア等で見聞きする度に心が痛みます。このような事故や事件が二度とないように自園の保育を見返し、見直す必要性がどの園でも日々の課題となっているのではないのでしょうか。

保育者としての想像力をフルに働かせ、環境を整え混乱のない保育が行えるよう十分な準備をする中で、思う事・考える事があります。安全を意識しすぎて大人が先回りする保育のやり方では、子ども達を強く、たくましく育てていく上で必要な経験や自ら考え行動する場を奪う事になってはいないだろうか。

2. 問題提起の要旨

子どもたちと日々過ごし保育に携わる中で誰もが危ない・危険だなと感じたり、思った事があるのではないのでしょうか。

好奇心の塊である子どもたちは、日々あちらこちらに動きまわり時には大人が想像もしないような行動をとることもあります。そんな子どもたちと過ごす中で保育者は子どもたちの「やりたい！出来る！」の気持ちを生かしながら危険を回避するよう予測し行動する事が時に必要となります。

危ない物・危ない事を安全な物・安全な事に変える事によって保育者は確かに安心する事ができるでしょう。しかし、それは子どもの本当の安全と言えるのでしょうか。本来身に付けるべき自分を守る術は経験や体験から習得させ、危険なものは危険だと教えていくことも大切なのではないのでしょうか。また、近年問題視されている子どもたちの具体的な体験や経験不足を加速させてしまう事もあるのではないかと思うのです。

子どもの主体性を尊重しながら安全を確保し、強く・たくましく育てていくには保育者はどのような関わりをしていったら良いのか事例と共に考えていこうと思います。

事例①「園のシンボルツリー桜の木の根」

自園の園庭には、大きく成長したシンボルツリー的、桜の木がある。

降園後、母親と共に園庭で遊んでいたAくんが桜の木の根につまづき転んで額に皮下血種（たんこぶ）ができた。

経年と共に根が張り出している部分があり、つまづいたと思われる。

- 対策案
- 木の周りに柵を立てる。
 - 周りに線を引き、近づけないようにする。
 - 危険な箇所を一緒に確認し、子ども達と何が危ないか話し合い共存する。



結果

花びらでおままごとをしたり、鬼が木に顔をふせ「だるまさんが転んだ」の遊びをしたり、桜を鑑賞し、幹に触れ絵を描いたり、木に集まる虫を観察・採取したりと子どもたちの日々の生活を豊かにし、好奇心や探究心を高める場所の一つである事、また桜の木にかぎらずその他の木・園外でも（公園や学校等）このような場面に遭遇する事もあるのではないかと考え、安易に立ち入らないようにするのではなく、何が危ないかを子どもたちと確認しながら共存していく事とした。



今後の取り組み

- 木の周りは根がある事、でこぼこしている事を確認させる。
- でこぼこしているような所はつまづいて転んだりする事があるので、足を上げ、足元に気を付けながら歩く事を教える。
- 今回の事例だけでなく、保育室内・園庭・フラットな場所でも転ぶ子が増えたように感じ、エバーマットの上を走る・障害物をジャンプ・またぐ等、遊びに取り入れていこうと思う。



その後 . . .

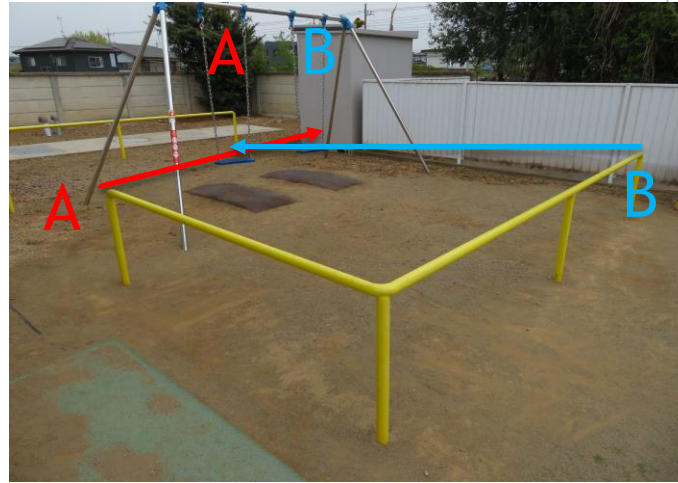
今年の春も桜の木の下で花見をする園児・保護者の姿、木の洞にいるコクワガタを発見し大喜びする子どもたちの姿など見る事ができ、共存を選択して良かったと思っている。ただ、またいつ今回のような事が起こるともわからないので、引き続き声を掛けながら共に過ごしていきたい。



事例② 「ブランコの柵」 「衝突」

自園でのブランコのルール

- ・ 順番を守ること。
- ・ 立ち乗り、2人乗りはしない。
- ・ 乗っている人以外の立ち入り禁止。
- ・ 止まってから降りる。
- ・ 決まった入り口から出入りすること。



【改善前】

自園の柵は幅の間隔が広く、子どもたちが簡単に柵をくぐり抜け中に入ることができてしまう為、ブランコに乗っている子とぶつかってしまったり、また鉄棒代わりに前回りをしようとしたが、柵が太くしっかり握れず、落下するなどの報告があった。

また、ルールの一つであった「決まった入口から出入りすること」このルールが中々守れず（特に年少児）Aの入口からBのブランコに乗ろうと飛び出しAのブランコに乗っている子と衝突しそうになったり、実際に衝突したりなどの事例がいくつかある。

- 対策案
- 柵を塞ぐ、柵の幅の間隔を狭くする
 - 柵の役割を説明する（柵はみんなを守るもの・遊ぶものではない）
 - 子ども・職員間でのルールの徹底
 - ブランコ・並ぶ場所の色分け（明確化）

結果

ブランコの柵に関して、職員会議で出た上記の対策案の他に木村先生から子どもたちの動線を物理的に遮断する方法もあると助言頂き、実際にくぐり抜けられないようネットで塞ぐことにした。また「決まった入口から出入りすること」このルールは特に年少児には理解することが難しいのではと思い、目で見て分かるようブランコと出入口を色分けすることにした。



対策後① ネットだけ



対策後② ネット+色分け

動線を遮断するには

ネットで塞ぐ



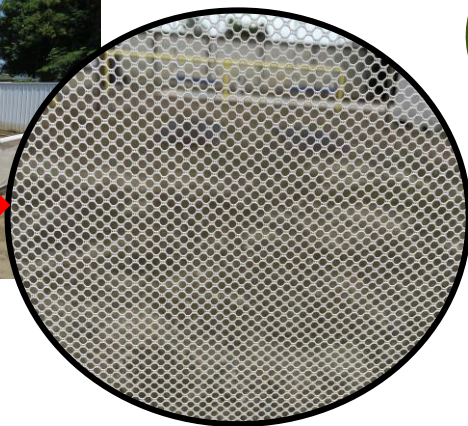
ネットで塞ぐことによって死角はできないか。指を入れたりしないか。



素材選び



指を入れたり、死角にならないメッシュを選択



色分けをするには

ペンキ? カラーテープ? スポンジ?



屋外である為、雨や日光による劣化に強い物



ポリエチレン素材のパイプクッション?

と考えている時に、丁度木村先生から柵にネットを掛けた事によって「鉄の柵が見えにくくなり、硬くて危ないもの」という認識が薄れ衝突するなどの危険がある」と言うお話を聞き、色分けもできて衝突した際の怪我也軽減できるパイプクッションを採用することにしました。

この2つの策を講じたことにより出入口が明確化され、柵をくぐり抜ける子や鉄棒代わりにする子がいなくなり、年少児でもルールを理解しスムーズに交換でき、保育者が常に声掛けをし続けなくても安心してブランコ遊びができるようになった。

課題

今年度から徐々にこの課題に取り組み始めた。劣化に強いと決めたポリエチレン素材のパイプクッションだが、まだ使用し始めて数か月の為、どのぐらいの耐久性があるのかまでは分からない。その為、今後も引き続き様子を見ていき、必要に応じて適切な対応を講じていきたい。

事例③「保育室は走らない」

保育室内で起こりやすい事例の原因で多いのが、自らの転倒・衝突という結果がでている。自園でもこの結果と同様に自らの転倒・衝突が多い。

- 理由
- 段差でつまづいた。
 - 出会い頭にぶつかった。
 - 走っていた。



- 今までの対策案
- ・ 走り回らないような環境作り、転倒や衝突に備えた環境作り
 - ・ 絵本や紙芝居・交通安全教室の映像等を用い、子どもたちにわかりやすく説明
 - ・ 根気強く話して聞かせる、繰り返し言葉掛けをする。
(「なぜ」「どうして」「どうなる」を子どもたちと考える)

走ってはいけないと分かっているにもかかわらず、興味のおもむくままに走ってしまう子どもたちに目配りしながら「お部屋の中では走らないでね。」と声を掛け続けているのが現状である。

なぜ走ってはいけないのか

転倒や衝突により、自分自身が怪我をする。または、誰かに怪我をさせてしまう危険性がある。

どうして走ってしまうのか？

どんな時

- 並ぶ時（トイレ・ブランコ・降園バスなど）
- 広いスペースがある
- おもちゃの貸し借り
- 同じ遊びをつづけている
- 体力が余っている
- 大人の声掛け（始まるよ・急いで～）

理由

- ➔ 1番になりたい
- ➔ 走りやすい
- ➔ ふとしたきっかけから追いかけてここに．．．
- ➔ 遊びのマナー化
- ➔ 思う存分体を動かせていない
- ➔ 声を掛けられ慌てて

- 新たな対策案
- 並ぶ時・集まる時の適切な声掛け
 - スペースの見直し
 - バリエーションのある遊びの提供
 - 保育の時間配分の見直し

見直し改善したことにより、少しずつではあるが保育室内での走り回ることによる転倒・衝突が軽減しつつある。

走ってはいけない場所は保育室だけ？

走ってはいけない場所・危険な場所は他にもないだろうか

- 公共施設（学校・図書館・病院など）
- 公共の場（公園・広場・道路・駐車場など）
- 商業施設（スーパー・レストラン・ショッピングモールなど）
- その他（人のたくさん集まる場所など）

結果

見直し改善するにあたり、どうして子どもは走ってしまうのか、どうして走ってはいけないのかを改めて考える必要があった。

改めて考えると、子どもの特性を理解し走らなくても大丈夫な雰囲気作り・声掛けを意識する必要性があった事、走ってはいけない場所・危険な場所は園内だけでなく、園外にも多くある事に気づいた。

狭い場所・見通しの悪い場所などを走ってしまうとどのような危険があるのか、環境面の対策ばかりにとらわれずその危険によってもたらされる事故や怪我について子どもたちと共に考え話し合う事も日々の生活の中での経験を通して、思考力・判断力を身に付けていく上で必要であると考え。教育方針である「三つ子の魂百まで」「すべての事に時あり」物事には教える時期があり、幼児期に身に付いた事は百歳になっても忘れない。だからこそ小さい時の教育がいかに大切であるか、その為いけない事をいけないと教える事が基本であり大切だと考える。

子ども自らが危険だと感じ判断が出来るようになるまで、経験豊富な私達大人が環境を整え見直し、色々な場面・状況を子どもたちにわかる言葉で伝えていきたい。

課題

日々の声掛けだけで言い続けるのでは効果が薄くなってしまいうだろう。「なぜ」「どうして」「どうなる」を共に振り返りながら定期的を確認していく作業が大切だと考える。

何故走ってしまうのか、走りたくなってしまうのか、子どもたちの思いに耳を傾け、大人が理解する事で環境や動線を確認する事が出来るだろう。毎日同じ言葉掛けを続けるのではなく、その時々に応じた言葉掛けの工夫や方法が大切ではないかと思う。

まとめ

大人が整えなければならないハード面（環境や設備）と大人が伝え教えてあげるソフト面（保育者との関わりや約束）の2つがバランス良く揃った時、子どもたちの「やりたい！」の気持ちに応えられるような保育、またわくわくするような体験ができる安全な保育になるのではないのでしょうか。

私達保育者は、園内だけ子どもの安全を守るのではなく、園外（公園・施設等）での活動でも起こりうるトラブルにも自分自身で判断し、対応する適応能力を育てていく事も大切なのではないかと思います。

大人の管理の元、大人に守られていなければ安全な遊び・生活が送れないのではなく、日々の経験や体験から自分で考え行動し、たくましい子へ育つよう私達大人はサポートしていく事が大切と考えます。

ご清聴ありがとうございました